あせび

白木蓮

花水木

大和文華館の四季（その２）

大和文華館館長　石澤正男

この号では大和文華館の３月から５月へかけての春の便りをお伝えする予定です。この冬は１月６日が小寒、同21日が大寒の入りでしたが、寒に入ってからも一向に厳しい、底冷えのする日もなく、或はこのまま春に滑りこむのではないかとさえ思わせられた位でした。それが立春を過ぎてから寒さがぶりかえし、それまでろくに見られなかった雪しぐれにも連日見舞われるようになり、遅ればせに奈良の冬らしさを取戻した感じでした。しかしそれまで異状に暖かだったため早春の花を代表する梅が１月中に綻び始め、晩秋から咲きだした山茶花が、例年ですと寒中に入れば蕾のままでしぼんでしまうことが多いのですが、それが寒椿と同様に寒中も咲き続けていました。２月中旬には早くも土筆（つくし）が頭を出し、よもぎの新芽もいささか丈がのびたところで寒波に見舞われ、今のところ足踏み状態になっています。でも、少し注意して見ますと、路傍に生えているはこべ、なずな、ははこぐさなぞが可憐な花をつけていますし、芝生や枯草の間にも日一日と緑が目についてきます。日も大分長くなってきました。季節外ずれの寒波にも拘わらず、春の気配は日増しにはっきりと感じられるこの頃です。

今朝は雪に明けて、この分では相当積るかと思った位でしたが、８時過ぎには降りやみ、それから間もなく鶯の啼くのを耳にしました。まだたどたどしい囀り方でしたが、私としてはこの春の初音です。例年より２週間位早いようです。鶯の姿は一般の人々には目につきにくいかと思いますが、文華館の構内の道を歩いているとつぐみとびんずいが地上で餌をあさっている姿を必ずといってよいほど見かけます。どちらも北国からの渡鳥で４月中には姿を消してしまいます。前号で冬の鳥の名を挙げましたが、うっかりしてびんずいを書き忘れましたので、ここにつけ加えておきます。びんずいはせきれい科の雀位の大きさの鳥で尾がやや長く、背部には暗緑色の濃淡のある縞目があり、いつも５６羽の群れを作っています。人を余り恐れず、よく地上を歩いていますから、その愛らしい動作が間近に観察できるのは楽しいものです。

昔から暑さ寒さも彼岸まで、というのは全国的に通用しているようですが、大和では東大寺二月堂のお水取りの行事が終るまでは春はおあづけといわれています。お水取りはもう始っており、間もなく終りますが、毎年お水取りに先立って殆んど人目にもつかず、ひっそりと咲き始めるのがあせびの白い小さな花だといってよいでしょう。奈良公園の飛火野の東寄りから春日山へかけてあせびの原生林のあることは有名ですが、この松林の中にもかなり自生しています。しかしここのあせびは樹令も若く、しかも散在しているため人目を惹くまでにはなっておりません。ただあせびを見ていて驚くことは花期の長い点で、毎年２月中には咲き始め、５月末まで咲き続けます。

お彼岸が過ぎるとそろそろ花の便りがいそがしくなります。３月下旬の松林を彩ってくれるのはこぶしの花と、それを一廻り大きくした白木蓮の花です。どちらも純白で葉に先立って美事な花を見せますが、これと好対照なのが、濃緑色のつやつやした葉蔭に真赤な花をのぞかせている山椿です。

４月に入るといよいよ花の便りはあわただしくなってきます。自生している花木で一番華やかなのは４月早々に青味のかかった薄紫の花を、まだ葉の出ない枝一面につけるみつばつつじです。この花と同時に真白な小さい花をびっしりつけるのが、しでざくらとざいふりぼくです。この三つが一寸した群落をなして毎年咲くのですが、生憎そこは山陰になっていて人目につかないのが残念です。４月の中旬には雪柳が正面の坂道の西側を白一色に蔽いますが、所々に山吹と連翹の豊かな黄色の花や、桃、梨、李、牡丹、海棠、花蘇芳、なぞが入り混って色とりどりに春の色を賑わしてくれます。数年前に植えた白とピンクの花水木も大分生長して花をつけるようになりましたので、これから段々皆様の注目を惹くでしょう。花水木はかなり花期も長いので将来が楽しみです。みつばつつじに続いて正面玄関の一帯は平戸つつじの華麗な色彩に包まれてしまいますが、その後は全山の至るところに自生しているもちつつじの淡い紫紅色の花が周辺の新緑に映えて初夏まで咲き続けます。

（３月３日誌す）

季刊 美のたより No.20
昭和47年４月１日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.